

他者のために、他者とともに
“For Others, With Others”



ペドロ・アルペ
Pedro Arrupe

訳者 瀬本正之

表紙説明：ペドロ・アルペ廟（ジェズ教会内）



“Men for Others” 講演 50 周年

1973 年 7 月 31 日、当時のイエズス会総長ペドロ・アルベ神父は、スペイン、バレンシアに集まったヨーロッパ・イエズス会学校卒業生の前に講演した。用意した原稿は非常に長いもので、時間の都合上、短くして語らなければならなかった。それでも、アルベ神父が語る言葉に卒業生の間では動揺が走り、なかには怒りを露わにして席を立つ者もいた。それほどに、卒業生にとっては耳の痛い話であった。

この講演のもとになった長い原稿は、のちにスペイン語で公になり、フランス語にも翻訳された。そして、卒業生の間で多くの批判を浴びるものとなった。英語訳はなかった。ヨーロッパ・イエズス会学校卒業生の会の公用語に英語がなかったからである。のちに、英語の縮約版がイエズス会から公式訳として発表され、世界中の人々がアルベ神父の講演内容を知ることになった。日本でも、リバス神父が『カトリック教育の新理念』として日本語訳を出した。ただし、この翻訳では、「イエズス会」(Jesuit) と書かれた部分はすべて「カトリック」(Catholic) になっている。「イエズス会学校」とか「イエズス会教育」では、日本においてはきわめて限定されてしまい、この講演の内容は、すべてのカトリック学校に伝えるべきとの思いが込められていたからであろう。

いったい何が卒業生の間にも動揺を走らせ、批判にさらされることになったのであろうか。それは、アルベ神父がそれまでのイエズス会学校の教育を一刀両断するような表現にあった。アルベ神父は講演の冒頭でこう切り出した。

まず、こう質問させてください。私たちイエズス会員は正義のために教育してきたでしょうか。あなたがたも私も知っています、あなたがたの先生であったイエズス会員の多くがこの質問にどう答えるかを。彼らは全き「真摯」さと謙遜さをもって、「私たちはそうしてこなかった」と



答えることでしょう。

加えて、あなたがたも、この自己評価に同感でしょうし、また、教会が今私たちに要求するような正義のための行動や、正義の「証」に向けては訓練されてこなかったことを、同様の「真摯」さと謙遜さをもって認めることでしょう。

卒業生には、自分たちが受けてきた教育が全面的に否定されたかのような言葉として響いたに違いない。ヨーロッパや北アメリカのイエズス会学校は、いわゆる「エリート校」として世間の評判は高い。400年以上にわたって、イエズス会の「学習規程」“Ratio Studiorum”に基づいて、厳格でそして学問レベルの高い教育を実践するイエズス会学校は、カトリック世界のみならず、ヨーロッパやアメリカにおいては高い評価を受けて来た。フランス革命を前後する時代に、イエズス会はヨーロッパ各地から追放され、ついには解散させられるに至るが、それでもなお、追放された先方で教育活動は行われた。ワシントンDCにあるジョージタウン大学はその好例であろう。近代国家の成立にともない、教育は国家の手によって行われるようになり、イエズス会学校のほとんどは国家に没収されたが、私学として生き残った学校は数多くある。さらに、宣教地において、教育活動を積極的に行ったイエズス会は、世界中の文化向上のために大きな影響を及ぼした。そしてそれは、はからずも、「社会のエリート」を生み出したことも事実である。

このようなイエズス会学校の歴史とあり方を前にして、アルペ神父は「正義のための教育」の必要性を語ったのである。それは第二バチカン公会議によって方向づけられたカトリック教会の姿勢を根本的に踏襲するものであった。アルペ神父自身、この講演のなかで、何度も第二バチカン公会議に言及した。カトリック教会がこの公会議を通して、それまでの教会の姿を現代社会の現実に対して適応し、刷新していく道を探り、その後に関かれたシノドス（世界代表司教協議会）でも、その方向性は



確認された。そして、その方向性の第一のものは、“preferential option for the poor”（貧しい者の最優先選択）であり、キリストの福音に基づく「社会正義」の実現に取り組むことであった。そして、カトリック教会にとって「社会正義」の問題に取り組むことは、福音宣教にとっては「なくてはならない」“constitutive”（構成的）要素として位置づけられたのである。

それは折しも、1970年代の発展途上の国々にあつては焦眉の急を要する問題であった。政治権力が民衆を抑圧し、貧富の差は拡大し、不自由と貧困にあえぐ民の声をカトリック教会は無視することはできず、彼らの側に立つことはイエスの福音に基づく姿勢でなければならないのである。

カトリック教会のこの根本姿勢を、アルペ神父はイエズス会刷新のための最重要要素として考えていた。バレンシアでの講演の2年後、1975年にイエズス会第32総会が開催され、そこでは、イエズス会の現代におけるミッションが「信仰の宣布と正義の促進」にあることを明確にしたのである。そしてこのミッションは、32総会から50年近く経った今日でも、イエズス会では確認され続けている。

それゆえに、イエズス会学校がイエズス会のミッションと結びついている教育機関であるならば、“Men for Others”の講演は今なお意味あるものであろう。「イエズス会教育」(Jesuit Education)という言葉は1980年代に登場した言葉である。それまでは単に「イエズス会学校」(Jesuit School)と言われていたに過ぎず、しかもその意味は、その学校にイエズス会員がいるということであった。イエズス会員がその学校で教育に携わっていれば、それが「イエズス会教育」だったのである。しかし、どこの国でも、学校現場で働くイエズス会員は限りなく減少していき、すでにゼロとなった学校も少なくはない。それゆえに、「イエズス会教育」とは何か論じられるようになったし、その教育を実践する学校が「イエズス会学校」であるという意識も生まれてくるようになった。いわば、“Jesuit School without Jesuits”を真剣に考えざるを得なくなっ



ているのである。

こうした状況のもとで、“Men for Others”の講演から50年を迎えることになった。アルペ神父はこの状況を予想したであろうか。1957年に遡るのだが、当時日本には三つのイエズス会中高があった。そこで働くイエズス会員が集って研修会を行った記録が残っている。管区長であったアルペ神父は最初に講話をしたのだが、その内容は、“Ratio Studiorum”（学習規程）に準拠し、イエズス会会憲に基づく方法を踏襲した運営を思い起こさせるのみであった。ただ二つの極端を避けるように勧めている。一つは、自分の出身国の教育モデルを強調し、適応させること。もう一つは、日本は特殊であるとして、他の国々の教育方法を学ぼうとしないことである。宣教師会員と日本人会員との間のバランスをとるようという意図が感じられる。しかし、イエズス会学校の刷新を示すような言葉は見当たらない。それでも、この10年後には、カトリック教会もイエズス会も大きく変革していくことになる。“Men for Others”はその画期となる講演だったのである。

その講演から50年が経つ。そして今や“Men for Others”という言葉は、全世界のイエズス会学校の共通のモットーとなった。そればかりではない。それぞれの学校が置かれた状況のなかで、社会正義を意識した学びは取り入れられるようになり、具体的な実践も行われるようになった。また、社会の周辺に追いやられ人々のための教育、学校施設もつくられ運営されるようになった。南アメリカを中心に展開されている社会の底辺に置かれた子どもたちの初等教育機関“Fe y Alegria”は1950年代から行われているが、ますます広がりを見せ、北アメリカにおいては、シカゴで始まったメキシコ移民の若者たちを教育する学校“Cristo Rey”が全国に広がり、大きな格差を生む社会にあって底辺に置かれがちなヒスパニックや黒人、先住民の若者を教育する学校が運営されるようになっている。アジアにおいても、政治的にも経済的にも不安定な国、たとえば、



東ティモールやカンボジアにおいて、恵まれない子どもたちのための学校がつくられるようになった。

ここで知っておくべきは、“Men for Others” というときの、“men” と “others” の意味である。“men” は「男」を意味しているのではない。最近、ジェンダーを意識するようになったため、イエズス会学校では、“men” だけでなく “women” も付けて、“Men and Women for Others, with Others” と言われるようになった。さらには、「男」や「女」にもこだわるべきではないとして、“For Others, With Others” とだけにするようにもなった。

しかし大事なことは、アルペ神父が語った “men” は何を意味していたかである。アルペ神父はこう言った。「自分自身のためではなく、神とキリストのために生きる人間、もっとも小さな人々のための愛を含まないような神の愛など想像することもできない人間、人間のためになる正義につながらない神の愛など茶番であると考える人間」であると。それゆえに、“others” の意味も明らかになってくる。それは、「もっとも小さな人々」「不正義の社会のなかで抑圧された人々」「社会の周辺に追いやられた人々」である。

“Men and Women for Others, with Others” あるいは “For Others, With Others” は、全世界のすべてのイエズス会学校で、「モットー」として使われるようになった。アルペ神父が語った言葉はすっかり定着したといってよい。そして、実際にその方向性に沿って教育ミッションを果たそうとする動きも現れて来た。さらにもっと、この教育ミッションを推し進め、“For Others, With Others” を生きようとする人を育成すること、イエズス会学校であり続けるためには、このことを忘れてはならない。言うまでもないことである。

上智学院カトリック・イエズス会センター長
李 聖 一



他者のための人

ペドロ・アルペ (1973)

1973年7月31日、イエズス会の総長ペドロ・アルペ神父は、スペインのバレンシアで開催された第10回ヨーロッパ・イエズス会学校同窓生国際大会で卒業生たちに向かって話した。「教会内の新しい意識」ゆえに、彼は、かつてイエズス会学校の卒業生は「正義の促進と虐げられている人々の解放への」参画を担保する教育を施されては来なかったと率直に認めた。それでも彼は、適切な適応策を講じれば「イエズス会教育の至上目的」は達成できるという希望に満ちていた。「他者のための人 (man for others)」に、すなわち「人間存在のすべてを覆う決定的な次元であり、他のあらゆる次元に意味を与える」ものである「愛において他者に自分自身を与え」ようと欲する人に、卒業生たちを育て上げることができると確信していたのである。

I. 社会の変革に資する教育

1. 「他者のための人」の育成

近年、正義のための教育がカトリック教会の主要な関心事の一つとなってきました。どうしてでしょう。わたしたちの主から託された使命の遂行には正義の促進と虐げられている人々の解放への参画がどうしても欠かせないという教会内の新しい意識がその理由です¹。今日、教会は、こうした意識に駆り立てられて、自らとその子らの、そして、すべての人の教育に否むしろ再教育に注力しています。わたしたち皆が「自分の生活全体を個人的・社会的倫理の福音的規範にのっとして方向づけ、それを日常生活のキリスト者的あかしの中に表明するようなものでなければならない」² のですから。

他者のための人 (men-for-others) の育成こそ、現代におけるもっと



も重要な教育目標です。自分自身のためでなく、神とそのキリスト——全世界のために生きそして死なれた神人（God-man）——のために生きる人々、もっとも小さな隣人たちへの愛を含まぬ神の愛など考えることさえできない人々、人間のためになる正義につながらない神の愛などまったくの茶番であると確信する人々です。

2. 過去の不備

この種の教育は世界中を席卷する教育の趨勢に真っ向から抗います。わたしたちイエズス会員はこれまで常に教育使徒職に重きを置いて献身してきました。今もそうです。ならば、これから何をしなければならないのでしょうか。時流に合わせるのか、それとも、抵抗するのか。イエズス会の総長であるわたしは、イエズス会学校の卒業生たちを前にしてお話するにあたり、これに勝るテーマを知りません。

まず、こう質問させてください。わたしたちイエズス会員はあなたたちを正義のために教育してきたでしょうか。あなたがたの先生であったイエズス会員の多くがこの質問にどう答えるかを、あなたがたもわたしも知っています。彼らは、まったく真摯さと謙遜さをもって、わたしたちはそうしては来なかった、と答えることでしょう。教会が今日「正義」や「正義のための教育」といった言葉に賦与している意味の奥深さに鑑みるに、わたしたちは、あなたがたに正義のための教育を施しては来ませんでした。

思うに、あなたがたも、このような自己評価に同意し、また、同様の真摯さと謙遜さをもって、今日教会が要求する類の正義のための行動や正義の証に向けて訓練されては来なかった、と認めることでしょう。このことは何を意味するのでしょうか。それは、これから為すべき仕事はわたしたちにはある、ということの意味しています。わたしたちは、協力してこうした不足を補い、何より、イエズス会学校で受けた教育が、将来、世界における正義の要求に適うものとなるよう、請け負わねばなりません。



3. 不備を繕う手段

困難でしょうが、わたしたちは成し得ます。歴史的な制約や失敗にもかかわらずわたしたちがそれを成し得るのは、不断の自己刷新と新たな問題状況への適応を可能にしてくれる何かが聖イグナチオの精神の真ん中にあるからです。

この何かとは何なのでしょう。それは神の意思を絶えず探し求める精神です。さまざまな時代にあつてキリストが、どこでまたどこへと、わたしたちをお呼びになつておられるかを認識させ、そうした呼びかけに応えさせてくださる聖霊に対する敏感さです。

これは、決して、洞察や知性の優秀さを誇る自惚れに満ちた主張ではありません。ただただ聖イグナチオの霊操から受け継いだわたしたちの遺産なのです。霊操は、神の意思に適った具体的決定を可能にしてくれる手段です。霊操によってわたしたちは、特定の選択肢に縛られず、置かれた状況において実践可能なあらゆる選択肢を見渡し、多くの可能性に満ちた包括的展望を抱き、神ご自身がその驚異的な独創性のすべてをもってわたしたちの歩むべき道筋を描き出してくださるところにまで辿り着くことができるのです。分かれたることのない心という意味での「不偏心」、神の意思以外の何ものにも縛られないこの一心さこそが、イエズス会と、イエズス会が光栄にもその教育に携わらせてもらう人々に、多角的な応需性と呼ばれるもの、すなわち、“時のしるし”が求めるいかなるもの、いかなる奉仕にも用意のできた即応性を賦与してくれるのです。

4. 回心への開き

過去のイエズス会教育には限界がありました。時間と場所に制約されていました。人間の企てはいつもそうです。けれども、もしあなたがたに、新たな挑戦に開かれた精神、変革へのこの応需性、聖書的に言うと回心への前向きの姿勢を手渡せていたとすれば、わたしたちの教育は完全な失敗を喫したわけではあり得ません。生ける神に耳を傾けるように、



たえず新たな光を見出すために福音書を読むように、常に古くいつも新しい神のことばをそれぞれの時代にふさわしい絶妙な音程と音色で響き渡らせる教会と共に考えるように教育してきたとすれば、そこにこそわたしたちの希望があります。こうした希望こそが重要なのであり、それこそが信頼できる未来の基盤なのですから。

今日わたしは、息子たちに話す一人の父親としてではなく、同級生に話す一人の仲間、一人の同窓生として、あなたがたに話しています。学校のベンチに並んで腰掛けながら、全人類の教師である主にいっしょに耳を傾けましょう。

Ⅱ. いかなる正義？

A. 正義への呼びかけ

わたしたちが考察すべきことが二つあります。一つは、福音と“時のしるし”に照らされることによってますます明らかになる正義とはどのようなものかをより深く理解することです。もう一つは、そうした福音的な正義を具現するために、“どのような人間”を育てたいのかを、“どのような人間”に向かって自分たちが変わり、後続世代の成長を促さねばならないのかをはっきりさせることです。

5. 1971年のシノドス

第一の考察は1971年のシノドス（世界代表司教会議）から始めましょう。「世界の正義（Justice in the World）」と題されるシノドス文書の冒頭にはこうあります。

キリストを信じ、全人類とともに、新たな創造の力となっている聖霊に心を開きつつ、ここに全世界から集まった私ども世界代表司教たちは、自ら世界の正義をさらに推進するために、神の民として何をなすべきか、その使命につい



て討議した。

“時のしるし”を詳細に検討し、いま起きつつある歴史的事実の意味をくみ取ろうと努力する一方、より人間的な世界を築こうと願い、かつ問うている人びとと心一つにして、私どもは神の言葉に耳を傾けた。その神の言葉とは、われわれが、人類の救いのための神のご計画を実現するに当たって、当然ながら帰依する言葉である。

もとより、世界情勢を厳密に分析することは私どもの仕事ではないが、少なくとも深刻な不正義の実情を認識することは十分できる。この不正義は、人間社会に支配、抑圧、虐待の輪を広げており、自由を抑制し、大部分の人びとがより幅広い正義と友愛的な世界を建設しこれを楽しむうえで、大きな妨げとなっている。

しかしまた私どもは、深遠から湧きおこり、世界をゆり動かす動きをも看取した。そのいくつかの実現はすでに正義の推進に貢献している。人間組織や人びとの間には、新しい意識がわき起こっている。そのため、人びとは宿命的なあきらめをふり捨てて、自らを解放し、自分の運命を切り開くために、責任を自覚する勇気を持ち始めた。人びとの間には、よりよい世界を望み、耐えがたくなったものを変えようとする動きがみられる。

6. 第二バチカン公会議とその後

こうした言葉は教会の伝統的な教えの単なる繰り返しではない、ということに留意しましょう。抽象的な理論のレベルで洗練された教義ではないのです。そこに響いているのは、神の教会とすべての善意の人々への抗いがたい促し、虐げられ苦悩の中にある人類への効果的な助けにつながる態度や行動を取るようにとの生ける神の呼びかけです。

“時のしるし”のこのような解釈は、本シノドスに端を発するものでな



く、すでに第二バチカン公会議とともに始まったもので、回勅『ポプロールム・プログレッシオ』の中で正義の問題に適用されました。この動きは拡がりを見せ、1968年にはメデジンで中南米地域の、次いで1969年にはカンバラでアフリカ地域の、そして1970年にはマニラでアジア地域の司教たちによって次々に取り上げられ、ついに1971年教皇パウロ6世は回勅『オクトジェジマ・アドヴェニエンス』を公にし、その中でこれらの声は一つにされ偉大な行動要請とされました。

本シノドスに参集した司教たちは、さらに一步押し進めて、最大限の明確さをもつ言葉で、「正義のための戦いと世界の改革への参加は、福音宣布の本質的な構成要素としてわれわれの前に立ちはだかっている。換言すれば、人類の救いと、人びとをあらゆる抑圧された状況から解放するための教会の使命を果たすことが、正義を実現し、世界を改革することだといえる」³と述べました。ですから、正義と抑圧からの解放のための行動と分かたれた神の言葉の宣布はあり得ないのです。

B. 正義をめぐる諸論点

これは実に明白な内容の話です。それでも、疑義や疑問が、さらには緊張さえもが、教会自身の内側から出てくるのを防げませんでした。こうした事実を認めないなら、素朴に過ぎることになるでしょう。シノドスの呼びかけを具体的な行動に移すにあたって生じてきた齟齬あるいは少なくとも意見の相違といった不一致に能う限りの調和をもたらすよう努力することが今のわたしたちの務めです。来たりつつある聖年（1975年）の精神である和解の精神をもって成し遂げたいものです。

そうした不一致が考えの対立ではなく強調点の違いであることに留意することから始めましょう。正義と解放への現今の呼びかけに鑑みて、わたしたちの態度、活動、生活様式に関して、強調点をどこに置くべきなのでしょうか。

1. 人間間における正義か、神の前における正義か
2. 神への愛か、隣人への愛か



- 
3. キリスト教的な愛徳か、人間的な正義か
 4. 個人の回心か、社会の変革か
 5. 現世の生における解放か、来世の生における救済か
 6. キリスト教的な諸価値の共有浸透による発展か、科学的な
テクノロジー操作技術や社会的な分析手法への専念による発展か

7. 正義と教会

教会の使命はこの地上に正義を行き渡らせることだけに止まりはしませんが、シノドスが明らかにしているように、正義を行き渡らせることが教会の使命にとって本質構成的な要素であることに違いはありません。旧約聖書にもこのことが示されています。主なる神と神の民とされた人々との間の最初の契約は、根本的には、人間間の正義を守らせる契約でした。人間間の正義を侵すと神御自身との契約関係が断たれるほどだったのです。また、新約聖書を見れば、キリストが御父からいただいた使命は、貧しい者に福音を、虐げられている者に解放をもたらし、正義を勝利に導く使命だったことが分かります。「貧しい人々は幸いである」⁴とあるのはなぜでしょうか。それは、神の国がすでに訪れており、解放者がすぐそばにおられるからに他なりません。

8. 隣人愛

わたしたちは、神への愛と隣人への愛を実践するよう、命じられています。人を愛することは神を愛することに等しいと言われたイエスの言葉を思い起こしてください。この二つの掟を一つにしたものが律法全体のまとめとされているのです。また、最後の審判を仄めかすイエスの話の中で、審判者は、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」⁵と語ります。アルファロ神父は次のように述べています。

キリストが示された神の国に迎え入れられるか否かは、



弱い人々や虐げられている人々に対するその人の態度如何によります。即ち、虐げられている人々というのはイザヤ書 58 章 1 ～ 12 節に書かれているように、人間の不正の犠牲者であり、神は彼らのために御自分の義を明らかに示そうと欲します。ここで驚くほど新しいことは、社会から軽蔑され、取り残された人々を、キリストがご自分の“兄弟”とされていることです。キリストは飢餓に苦しんでいる者、貧しい者、弱い者の側に立ち、味方となりました。このような弱い立場にある人々は、皆、キリストと共に歩んだ兄弟なのです。従って、このような人々に対して為すことは何事も全てキリストに対して行うことになるのです。キリストの兄弟を救うために立ち上がる者は、誰でも、神の御国に迎え入れられます。反対に、このような人々を悲惨なままにして顧みない者は、皆、自ら御国に入ることを拒む者となります⁶。

9. 愛と正義は抱き合う

神への愛は隣人への愛と分かちがたく溶け合っていると捉えるキリスト教にとって、愛と正義もまた抱き合うものであり、実際には同じものなのです。愛する人を不当に扱うことができるでしょうか。愛から正義を取り除くとその愛は壊れます。愛する人を尊敬すべき尊厳を有する人格として尊重しないとすれば、あなたは愛を持ってはいません。正義とは各人に、その人のもの、その人に負っているものを与えることだというローマ法の考えを踏まえると、キリスト者なら、すべての人に対して自分は愛を負っており、それは敵に対しても同様である、と言うに違いありません。人を愛していないなら、神を愛しているとは到底言えないのと同様、わたしたちの愛が正義の業を生み出さないなら、そもそも愛をもっていること自体が不確かなのです。わたしが言おうとしているのは、単に個人主義的な正義の業ではなく、次の三つのことです。





第一点は、他者を決して自己利益獲得の手段にせず、すべての人を尊重するという基本姿勢です。

第二点は、受動的だとしてもそうすることは能動的な抑圧と同等なのだから、特権的な立場に伴う力による利益獲得や買収は決してしないという強固な決意です。特権の安楽さに溺れることは不正の果実を無言で味わう者つまり不正の支援者となることなのです。

第三点は、不正に対しては拒絶するばかりでなく反撃するという姿勢、すなわち、世の中で弱い立場に置かれている人々、虐げられている人々、周縁に追いやられている人々が解放されるよう、不正な社会構造を取り除くために他者とともに働くという決断です。

10. 個人の回心から社会の変革へ

罪は、わたしたちを個人として有罪にする個人的な行為に過ぎないのではありません。それに加えて、罪は、わたしたちの周辺にも触手を伸ばし、わたしたちの習性、慣習、自発的な反応、思考の基準やパターン、想像力、意志を損ないます。わたしたちの“周縁 (*periphery*)” に影響を及ぼすのは自分自身のみではありません。それは、わたしたちを形作るすべて、わたしたちの世界の一部を成すすべてで構成されているのです。

わたしたちは、悪への生来の傾きを持っています。これは、神学の言葉遣いでは“情欲 (*concupiscence*)” と称され、具体的には、アダムの罪と人類史の至る所で犯されたあらゆる罪——わたしたち自身のものをも含め——がわたしたちの中で結び合わさったものです。人が回心した時、神が人の中に感嘆すべき義化 (*justification*) の効果を及ぼされる時、その人は自己の内奥で神と同胞とに向き直り、その結果、厳密な意味での罪は拭い去られます。しかしながら、罪の影響はその人の“周縁” に強力な支配力を及ぼしつづけます。しかも、しばしば、本人はそのこと



に気づくことさえありません。

キリストは、単にわたしたちを罪から自由にするためばかりでなく、わたしたちの人格の中心を彼の恩寵で溢れさせるために来られました。彼は、わたしたちの自己を——わたしがわたしたちの“周縁”と呼ぶものをも含め——「丸ごと」神のために勝ち取るために来られたのです。キリストは、罪を亡き者とするばかりでなく、生きている限り被るその結果をも亡き者とするために来られたのです。彼の恩寵をわたしたちに与えるためだけでなく、その恩寵の力を示すために来られたのです。

このことの意味を、個人的な回心（personal conversion）と構造的な改革（structural reform）との関係性に属するものとして、見てみましょう。もし“個人の回心”が人格のまさに中核でのみ作用する義化という狭い意味で理解されるのなら、それは事の真相を適切に表現していません。というのも、“義化”は刷新の根源、出発点であるだけでなく、わたしたちの存在の“周縁”での構造的な改革でもあり、単に個人的なものではなく、社会的なものだからです。

この点について同意が得られれば、結論は容易に出てきます。というのは、この世界にある構造——わたしたちの諸慣習、わたしたちの社会的・経済的・政治的な諸システム、わたしたちの商業上の諸関係、一般的に言えば、わたしたちが自分たちのために作り上げてきた諸制度——は、不正を内蔵している限り、客体化された罪の具体的な形だからです。それらは、人類史の至る所で犯されたわたしたちの罪の帰結であると同時に、さらなる罪への継続的な刺激や拍車ともなります。

こうした現実を指す概念が聖書にあります。それは、聖ヨハネが否定的な意味で“世”と呼ぶものです。個人的な領域における“情欲”に相当するものが、社会的な領域における“世”です。古典的定義によると、“情欲”は「罪から生まれ、わたしたちを罪に傾かせ」るからです。

“情欲”と同じく、このような意味で理解された“世”も、わたしたちの浄化努力の対象に違いありません。正義についてのわたしたちの新たな見方は、新しい種類の霊性や修徳を、否むしる個人的なものばかりで





なく社会的なものをも含む、伝統的な靈性や修徳の拡張をもたらすに違いありません。一言で言えば、内面的な回心では不十分なのです。神の恩寵は、わたしたちが自己の全体を神に向け直すだけではなく、世界の全体を神に向け直すよう、呼びかけておられます。わたしたちは、個人の回心を構造的な社会変革と切り離すわけにはいかないのです。

11. 闘いは今も続く

したがって、こうした浄化、こうした社会的修徳、こうした地上的な解放はキリスト者の生きる姿勢においてそれほどまでに中心的なもので、正義のための闘いから遠ざかる人は誰でも、同胞たちへの、そして結果的には、神への愛を言わず語らず拒んでいる、ということになります。正義のための闘いが終わることは決してないでしょう。生きている間にわたしたちの努力が十全な成功を収めることはないでしょう。でも、そうした努力には何の価値もない、ということではありません。

神は、そうした部分的な成功を望んでおられます。それらは、キリストによって成し遂げられた救いの初物です。それらは、御国の到来のしるしであり、御国が人々の間に神秘的に拡がりつつあることの目に見える徴候です。無論、部分的な成功は、部分的な失敗を、苦痛に満ちた失敗を、この“世”に抗う闘いの中で打ち倒され押し潰されるであろう多くの人々の、われわれの多くの敗北を含意しています。この“世”は、黙ったままで済ますことなどないのですから。この“世”は、傘下のない人々や盾突く人々を迫害し、抹殺しようとするでしょう。

しかし、こうした敗北は表面上のことではしかありません。まさに正義のために迫害を被る人々こそが祝福されるのです。まさに十字架につけられる者こそが「よい働きをしながら、ことごとくいやしながら」⁷世を過ぎ越すのです。



12. 操作技術と分析手法の必要性と不十分さ

言われなくてもみんな分かっているのだから、世の中にはもろもろの不正があるという一般的な指摘では不十分である、その通りです。原理的なことを述べ立てたのなら、世界地図を見ながら、罪と不正の根城となっている一地理的、社会学的、文化的な一最重要地点を指し示さねばならない、これもその通りです。そうするには、実際に不正を除去し解体するための分析と行動の道具として操作技術や分析手法が必要である、まったくその通りです。

それでは、キリスト教的な諸価値の共有浸透が、キリスト教的なエトスが果たすべき役割は何もないのでしょうか。操作技術や分析手法は必要ではあるものの、それらはその起源からして善と悪とのないませであると思ひ起こさせるという役割があります。操作技術や分析手法の中にもあれやこれやの不正が住み着き、蠢いているのです。

換言すれば、操作技術や分析手法は道具、しかも不完全な道具です。キリスト教的なエトス、キリスト教的な価値観こそが、そうした道具に評価を下し、その自己絶対化傾向を相対化しつつ、それらを利用しなければなりません。すなわち、こうした道具の助けなしにはキリスト教的なエトスによる新しい世界の構築は到底不可能だ、としっかり認めた上で、それらを相対化する務め、いわばそれらを分相応の場に置き直す仕事があるのです。

III. どのような人間？

13. 生涯教育

このような背景を踏まえた上で、これから第二の考察に入っていきます。相対立する主張を和解させつつ世界をもっと正義に適ったものにするために献身する人々の養成、わたしたち“古参”の継続養成、やがて立ち上がってくれるであろう若者たちの基礎養成に係わる考察です。





生涯教育に関して言わせてください。イエズス会学校の卒業生の会は“卓越した仕方”その実現の道を切り拓くよう呼びかけられている、とわたしは考えています。これこそ“あなたがたの”仕事です。教育使徒職に携わっているイエズス会員の助けを得ながら、そのための具体的なプランやプログラムを作り上げてください。

生涯教育とは何かについてあまりに限定的な理解で済ますことのないようにしましょう。それは単に技術的あるいは専門的な知識のアップデートであるはずではなく、あるいは、急速に変わり行く世界からのチャレンジに見合う再教育でさえもないはずです。むしろ、それはキリスト教的な教育におけるもっとも固有なもの、すなわち回心への招きであるべきです。今日それが意味しているのは、“時のしるし”を通して神が見させてくださる正義の証しに向けてわたしたちを準備してくれるであろうところの回心です。

14. 他者のための人

今日、教会は、世界は、どのような人間を求めているのでしょうか。約めて言えば、他者のために生きて働く“他者のための人 (man-for-others)”です。でも、“他者のための人”は人間の本性そのものと矛盾しはしないでしょうか。人間は“自分自身のための存在 (being-for-himself)”ではないでしょうか。力をもたらず知性を備えた人間は、自分自身を中心として世界をコントロールしようと躍起になりはしないでしょうか。それが人間の使命、人間の歴史なのではないでしょうか。

そうです。確かに、良心と知性と力を備えた人間は一つの中心です。ただし、自分から出て、愛において他者に自分自身を与えるよう呼び出されている中心です。このような愛こそが、人間存在のすべてを覆う決定的な次元であり、他のあらゆる次元に意味を与えるのです。愛する人だけがひとりの人としてまったき自己実現を遂げます。他者に対して自己を閉ざす度合いに応じて人は、一己の人格以上のものではなく、それ未満のものになるのです。



自己利害ゆえにのみ生きる人は、他者のために何も提供しないばかりか、もっと大きな悪をもたらします。その人は、知識や力や富を増し加え占有しようと躍起になり、またそこから、自分よりも弱い人々に対しては必ず、その人々に固有の分として神から賦与されている人間的成長の手段を否定するのです。

15. 世界の人間化

世界の人間化が世界を人類に資するものとするものでないとしたら、他の何であり得るのでしょうか。しかし、利己主義者は、物質界を人間化しないばかりか、人間自身を非人間化してしまいます。利己主義者は、人間を、制圧と搾取と略奪の対象と化し、ただの物に変えてしまうのです。

利己主義者がそうした行いによって自分自身を非人間化してしまうことこそが悲劇なのです。利己主義者は、貪るようにして手にした所有物に自分自身を明け渡し、その奴隷となるのです。もはや彼は、自己を所有する一己の人格ではなく人格ならざるものに、盲目的な欲望とその対象物に翻弄される物に成り下がるのです。

でも、こうした仕方ですら自らを非人間化、非人格化する時、わたしたちの内側で何か動き出します。欲求不満に陥るのです。心の奥底では知っています、自分が所有しているものは、自分がそうであるもの、そうあり得るもの、そうありたいものと比べると無に等しいものだということを。わたしたちは自分自身でありたいのです。それでもわたしたちは、敢えてその悪循環を断ち切ろうとはしません。却って、より多く所有し、他の人々よりもたくさんのもを所有し、どこまでももっともって所有しようと努めることによって欲求不満を克服できると考えてしまうのです。こうして、きりのないばかげた競争にわたしたちは陥ってしまいます。

野望と競争と自己破壊の下降螺旋が止まることなく捻じれつつ拡大し、欲求不満を募らせつつ悪化する非人間化にますます強くつながれてしまいます。

自分自身の非人間化そして自分以外の人々の非人間化。こうした利己





主義的な生き方を通じて利己主義が社会構造の中に翻訳され客体化されます。利己主義という個人の罪から始まって、いみじくも客体化された罪とも称される非人間化を助長する社会構造を堅牢化し、他者の搾取者となっていくのです。こうした非人間化の過程は、思想の中で、制度の中で、制御不能の個性なき非情の組織体の中で鍛えられ、自己と他者とを破壊する専制的な権力と化すからです。

どのようにしたら、この悪循環から抜け出せるのでしょうか。明らかに、この全過程は利己主義つまり愛の否定に根差しています。しかし、利己主義と不正が広く行き渡っている世界で、利己主義と不正が社会構造そのものに組み込まれているところで、愛と正義に生きようと試みることは、自殺的な取り組みあるいは少なくとも無益な取り組みではないでしょうか。

16. 邪悪な世界での善良さ

でもそれは、キリスト教のメッセージの核心そのものに横たわっているキリストの呼びかけの要約であり実質なのです。このことを聖パウロは「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」⁸という一文で言い表しています。この教えは、敵への愛についてのキリストの教えと同じものであり、キリスト教の試金石です。わたしたちは皆、他人に対して善良でありたいと欲し、また大半の人々は良好な世界の中でなら比較的善良なことでしょう。困難なことと言えば、邪悪な世界で善良であること、他人の利己主義と社会制度に組み込まれた利己主義から攻撃され絶滅への脅威を被るところで善良であることです。

このような条件下で唯一可能な反応は、悪には悪で、利己主義には利己主義で、憎しみには憎しみで対抗すること、要するに侵略者自身の武器で侵略者を滅ぼすことのように思えます。でも、こうした道をとることは、却って、悪によって完全に打ち負かされることではないでしょうか。というのも、外的な損傷を被るだけでなく、わたしたちの心そのものが害われるからです。わたしたちは、聖パウロの言う「悪に負けること」



に甘んじることになるのです。

そうではなく、悪は善によって、憎しみは愛によって、利己主義は寛大さによってのみ克服されます。そのようにして、わたしたちはこの世界に正義を蒔かなければなりません。正しくあるためには、不正から遠ざかることでは不十分なのです。さらに進んで、自己利害の代わりに愛を社会の推進力とし、ゲームに加わることそのものを拒まなければなりません。

すべてとても心地よく響くが少々非現実的だ、と言われるのでしょうか。それではより具体的に考えましょう。愛による正義という原理をどのように日常生活という現実レベルに適用すればいいのでしょうか。それは以下の三つの態度を涵養することによってです。

17. より簡素な生活

第一の態度は、個人として、家族として、また社会集団として、より質素に生きると固く決心することです。そして、贅沢な生活や上昇螺旋指向の飽くなき社会的競争を辞めるか、少なくともそのスピードを落とすようにしなければなりません。消費社会の風潮に断固として抗う男女が必要です。友達が持っているからと言って闇雲に欲しがることのない男女、限られた仲間内では必需品だが人類の大多数はそれ無しに過ごしている贅沢品の多くを手放そうとする男女が必要です。もしそれで余剰収入が生じるなら、生活必需品が依然として手の届かない贅沢品である人々に差し出しましょう。

18. 不正な利益の拒絶

第二の態度は、明らかに不正と言えるところからは一切利益を得ないと固く決心することです。また、そこに止まらずさらに進んで、貧しい人々に生産コストの重圧を掛けつつもすでに豊かな人々には生産報酬を生じさせるような社会・経済システムの恩恵に与ることから漸次撤退しなければなりません。自分の特権的地位を強めることではなく、不利





な状況に置かれた人々のために自分の特権をでき得るかぎり減らすよう精魂を傾ける男女が求められています。特権的少数者の一人ではない自分にはこのことは当て嵌まらない、と早急に結論を出さないでください。特定の観点だけからとは言え、またより裕福な人々による不正な差別の犠牲者であってさえも、一定の社会的地位にある人ならそれに当て嵌まるのです。こうしたことに言及する際、わたしたちは、自国や第三世界にいる本当に貧しい人々、本当に軽んじられている人々をこそ基点とせねばなりません。

19. 変革の担い手

第三の態度は、もっとも難しいものですが、単に不正な仕組みや取決めに抵抗するだけでなく、その変革に積極的に取り組むこと、変革の担い手 (agents of change) になるという強固な決意です。というのも、一旦、不正な構造に由来する収入を減らす方向へと一歩踏み出せば、すぐにも、そのような構造そのものを変えなければならないと認識するでしょうから。

でも、自分のポストから降りさえすればいいと考えるなら、あまりに単純な行動をとることになるでしょう。そうするのが正しい場合もあるかも知れませんが、通常それはむしろ社会構造全体を利己主義者たちの手に委ねてしまうことにしかならないからです。そこでこそわたしたちは、正義のための闘いの困難さを、また操作技術と分析手法という道具の必要性を思い知ることになります。卒業生間の協力や同窓会間の協力が有益であるばかりでなく必要である所以がここにあります。

ことに労働者のグループに属する卒業生たちを会の顧問として迎えることを忘れないでおきましょう。つまるところ虐げられている人々こそが変革の主要な担い手でなければならないのですから。特権に恵まれた人々の役割は彼らを補助することであり、変革を必要とする構造へからの圧力を上からの圧力でもって強化することなのです。

20. 「他者のための人」であるキリスト

初等教育であれ、高等教育であれ、生涯教育であれ、イエズス会教育の至上目的はもっぱら「他者のための人 (men-for-others)」の育成にあります。もしこれまでのわたしたちの考察に何らかの実質が伴っているのなら、それは、聖イグナチオの霊操に由来するヒューマニズムの伝統が現代世界にまで及んでいるという事実です。「他者のための人」であることによってのみ、わたしたちは、自然的な意味においてばかりでなく、聖パウロのいう“霊的な (spiritual)” 人という意味で、十全に人間的な存在になるのです。そのような人こそ聖霊に満たされた人です。この霊が、この世の救いのためにご自分の生命をお与えになったキリストの霊、人間となることによって何人にもまして「他者のための人 (a Man-for-others)」となられた神の霊であることをわたしたちは知っています。

注

1. 1971年シノドス文書『世界の正義』（中央出版社、昭和49年邦訳初版）7、25頁参照。
2. 同書、31頁。
3. 同書、7頁。
4. ルカによる福音書 6・20。
5. マタイによる福音書 25・40。
6. Juan Alfaro, S.J., *Theology of Justice in the World*, Pontifical Commission Justice and Peace, 1973, p. 28 参照。
7. 使徒行伝 10・38〔日本聖書協会訳〕参照。
8. ローマの信徒への手紙 12・21。





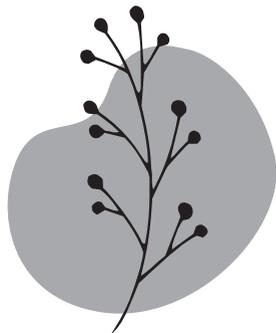
ペドロ・アルペ神父略歴

- 1907年 スペイン・ビルバオで生まれる(11月14日)
- 1922年 マドリッド大学医学部入学
- 1926年 ルルド巡礼
- 1927年 イエズス会入会
- 1932年 スペインからイエズス会追放される
- 1936年 オランダのファルケンブルクで司祭叙階
- 1937年 アメリカ合衆国カンザス州の聖メアリー大学で神学の4年目を学ぶ
 - 同年 オハイオ州クリーブランドで第三修練を行う
- 1938年 横浜港到着(10月15日)
- 1940年 山口に派遣される
- 1941年 憲兵隊に連行され、山口の刑務所に収監される
- 1942年 広島長束修練院院長、修練長に任命され、広島へ
- 1945年 広島に原爆投下(8月6日) 負傷者の治療活動を始める
- 1954年 日本のイエズス会が準管区となり、準管区長に任命される
- 1958年 準管区が管区に昇格するにともない、管区長に任命される
- 1965年 イエズス会 31総会にて第28代総長に選出される
- 1971年 総長として日本訪問(4月5日～13日)
- 1973年 スペイン・バレンシアにて“Men for others”の講演(7月31日)
- 1974年 イエズス会 32総会開催
- 1979年 ベトナム難民に対応するため、Jesuit Refugee Service (JRS) を立ち上げる
- 1981年 フィリピンからの帰途、ローマ・フィウミチーノ空港時に脳血栓で倒れる
- 1983年 イエズス会 33総会で総長を辞任
- 1991年 ローマのイエズス会総本部にて死去(2月5日)
- 2018年 バチカンがペドロ・アルペ神父の列聖調査を正式に行うと発表

訳者 瀬本正之略歴

- 1953年3月 岡山県倉敷市水島で生まれる
1971年3月 六甲学院中高等学校卒業
1975年3月 京都大学理学部数学系卒業
1975年4月 六甲学院中高等学校にて数学教諭（～1977年3月）
1977年3月 イエズス会入会
1985年3月 司祭叙階
1991年4月 上智大学文学部人間学研究室（～2009年3月）
2009年4月 同 神学部（～2023年3月）





上智学院カトリック・イエズス会センター

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

TEL 03 (3238) 4161

E-MAIL catholic-co@sophia.ac.jp

Web <https://sophia-catholicjesuit.jp/>

場所 2号館1階

開室時間 9:00 ~ 11:30 / 12:30 ~ 17:00

第2版 2023.08.08

